

茂木草介

少年と

(三)



けな
人びと
(三)



茂木草介

検印廃止

けったいな人びと (三)

昭和四十九年二月二十五日 第一刷
昭和五十年四月一日 第二刷

著者 茂木 草介

発行者 浅沼 博

印刷 凸版印刷株式会社
製本

発行所 日本放送出版協会

郵便番号 一五〇

東京都渋谷区宇田川町四一―一

(落丁本・乱丁本はお取替いたします)

けったいな人びと
(三) 目次

再 会 五

恋 愛 戦 五

冬の時代 一四

夢 よ！ 二〇

風の中で 二五

題
字

裝
幀

加
藤
義
明

け
っ
た
い
な
人
び
と
(三)

再 会

一

おいまは、ふところの奥深くに秘めてある与一郎の葉書を取り出して読み返してみた。

大阪はもう春やと思う。満州は寒い。米村君と二人で、いまええ仕事を探している。そのうちにまた便りを出します。身体を大切に……

与一郎が奇術師の昇玉斎天カスこと米村某と一緒に満州に渡って、半月目に届いたのがこの短かい文面の葉書である。それから大方おおかたふた月が経つというのに、以後なんの音沙汰もない。

「あのひと、何をしてますのやろな……」

釜場の窓から春の空を眺めて、おいまが長嘆息をもらしたときだった。

「今日は、おばさん！」

店の方から聞き覚えのある声がした。

「聡ちゃん？」

客席を覗くと、やはりそうだった。

大学の真新しい制帽をかぶって、笑顔で立っている。

聡はこの四月から、大阪のある大学の予科へ入学したのだ。

東京の第一高等学校へ入るのが年来の望みではあったが、それはそれとして、何はともあれ

上級校へ進学出来たことはやはり嬉しいのだろう。

「帽子、よう似合いますわ」

おいまがほめると、

「そうですか……」

聡は照れながら帽子を脱ぎ、両手で揉むようにしてからもう一度かぶり直すと店の外へ、

「入んなさいよ！」

と、声をかけた。

「誰れ？」

おいまが訊くのと、入口の戸の陰からセーラー服姿の波留子がそっと顔を覗かせるのが同時だった。

「ああ、お嬢ちゃんも一緒にっかいな」

おいまは愛想よく波留子を迎え入れた。

「ほかに、行き先きがなかったんでね……」

聡が頭を掻きながら言った。

今日は波留子の学校が始業式だけだったので、二人で示し合わせ、夕方まで友達の家で遊んで来ると家の者をだまして学校の帰りに中之島公園で落ち会ったのだそうだ。

彼等はいまでも一週間に数回、勉強を口実にして鞆つぼの家で会っているのだから、なにもわざわざそんなことをする必要はないのだが、これも変化を喜ぶ若人の習性とも言えるのだろうか。

しばらく川べりのベンチに腰かけて喋っていたが、長くなると、やはりまだ川風が寒い。それでも我慢をしていると、身体が震え出して二人とも止まらなくなってきた。と言って、どこへ行く宛でもない。

そこで、南森町のおいまのウドン屋へ来たという訳だ。
「よろしよま。なんぼでもいてとくなはれ。なんやったら、奥の六畳へ行きやりますか？
わて、ここにいてたげますよって」

おいまが、精々気を利かせると、聡は慌てて、
「い、いいえ、いいんです。ここでいいんです」

と、吃りながら言い、

「あのう……ウドン作ってくださいませんか」

指を二本、まっすぐに突き出した。

「フフフ……」

おいまは笑ってしまった。

聡の照れかくしが見えすいている。

「まだ、お腹すいてえしまへんやろがな。なァお嬢ちゃん」

おいまが訊くと、波留子は正直に、

「へえ」

と答えた。

「そや！ ええことおますわ」

咄嗟においმაが一計を思いついた。

人は誰れでも、自分がその身になってみないと判らないというが『与一郎恋しや』の情念が若い恋人達への同情となるのだろうか。

「あのな、聡ちゃんは帽子と上衣を脱いで、叔父さんの毛糸のセーターを着なはれ。それからお嬢ちゃんは、わての着物貸したげまっさかいな。それで、兄妹みたいな顔して、どこぞへ行つといなはれ」

「どこへ行くんですか」

「動物園か活動写真か……」

「映画ですか。ああ、それはいいな」

聡は同意を求めるように後ろの波留子を振り返った。

「へえ」

波留子も嬉しそうに微笑んだ。

「ア、それやったらちょうど、ピラ下がおますわ。阪妻のチャンバラ。よろしよまっせユ」

おいმაが声を弾ませた。ピラ下というのはボスターの右下の隅にしている三角の券で、これを切り取って持つて行くと無料で入場が出来る。場末の映画館に多かった。

「いえ、いいです。ぼくたち道頓堀へ出て洋画を見ますから」

聡はおいმაの申し出をにべもなく断ると、波留子を促して、早速、奥の六畳で着替えにとりかかった。

聡が先きに上衣をぬぎ、与一郎のセーターを抱えて部屋を出ると、それから波留子が手伝っ

てもらっておいまの着物に着替えた。

釜場の土間に二人が並ぶと、聡はまだ中学生のころの坊主頭のままだだったので、セーラー服を脱いだ波留子の方がむしろ年上の姉のように見えた。キチンと締めた帯の上にむっちり盛り上がった曲線など、もうすでに、立派に成熟した娘のそれである。

「お小遣いは？」

おいまが訊くと、

「ええ、夕べ房吉叔父さんから、入学祝いをたんまりもらいましたから……」

聡は笑って、ズボンの尻のポケットのあたりをたたくてみせた。

房吉は例の「胃腸病には飲んで効く」「神経痛には塗って効く」とかいいうおかしげな薬で相変わらず景気がいいらしい。そういえば四、五日前にも、房吉から、新町の芸者を身請けして困りたいのだが、どこか静かなところで小奇麗な二階を貸してくれる家はないだろうかと、おいまが頼まれたことがある。

「へえへえ、よろしよま。わては二階借りの名人でっさかいな」

その時、口では機嫌よく返事はしたものの、おいまは腹の中で、

（誰れが、アホらしい！）

と憎々しげに呟いていた。

房吉は、かつておいまが鞆の大榎家で女中をしていたころ、彼女に心を寄せたことのある男である。そんな相手からぬけぬけと二号のための貸間探しを頼まれて誰れがおいそれと走り廻るものか！ おいまは別に房吉を愛しはしなかったが、しかしそれでもやはり嫉妬の角は生

えるのだ。まことに奇妙な女心の屈折である。

おいまは二人を店の戸口まで見送りに出ながら、聡に訊いた。

「慎吾さん、就職試験の方は、どないでしたんや？」

「慎吾というのは聡の義理の叔父に当たる。」

「ええ、なんとかうまく行ったらしいですよ。黒川精密機械工業とか余りきいたことのない会社ですけど」

「へーえ、ほたら小さいとさん、ひと安心でんな。けど、精密機械いうたら何をこしらえる会社ですのやろ」

「知りません。でも、ボクのカンでは多分、軍需品の下請け工場じゃないかと思うんですがね」

「軍需品いうたら、兵隊さんの……？」

「そうです」

「へーえ、どこぞで戦争やってますのンかいな」

「ええ、いまは一応休戦状態で落ちついてますけど、大陸向けに、いろいろ準備してるんじゃないんですか？」

「あッ怖わ……なんでまたそんな物騒な会社……？」

おいまが目を大きくして身慄い^{みぶる}をしてみせると、聡は片手を頭にやって首を傾げ、

「そういう話は、ぼくらのような若いものには何がどうなっているのかよく判りませんが、しかし慎吾叔父さんは、この就職難の時代に、とにかく勤め口がみつかったというだけで嬉しい

んじゃないですか？」

と、大人びた口調で言い、

「じゃ、行って来ます」

軽く頭をさげると、横に立って待っていた波留子を目で誘って、仲よく一緒に出かけて行った。

「ごゆっくり！」

おいまは声をかけ、二人が笑顔で振り向くと、両手を万才にして振って見せた。

だが、この彼女の折角の思いやりが、実は裏目に出て却って仇になってしまったのだから浮き世とはままならぬものである。

その夜、靱の大榎家は騒ぎだった。

興奮に目尻を吊りあげた波留子の姉のお末を座敷の正面に据えて、対しては、象さとはな枝。この、はな枝の場所には、本来ならばこれまでの経緯で与一郎が坐るか、或いは母親役のたか子が出るべきなのだが、いまはどちらも不在である。否、たか子はすでにサンフランシスコを離れて、目下太平洋を一路、懐しの祖国に向かって航行中の船の中なのだ。

「それでは、おばあさまと、どなたか他に責任を持っていただけのお方をもう一人……」

というお末の注文で、仕方なく、はな枝が代わって顔を出した。つまり、問題はそれほど重大なのだ。

再 会

この三人に少し離れて、聡と波留子が小さく肩を並べ、膝を揃えて坐っていた。

「ま、そんな訳けでございましてな」

お末は、出されたお茶をグッとひと息に呑み乾すと言った。

「わては与一郎さんを信用して、波留子と聡さんのお付き合いを許しましたンだす。そのいきさつはご存知でございまっしゃろな」

「へえ、知っております」

ふさが眼鏡越しに恐る恐る答えた。答えながらふさは心中、

(なんでこんな奇麗なおひとが、三十にもなるまでひとりでのいのやろ……?)

そして、多分この勝気な気性が禍いして、男が寄りつかないのであろうと判断を下した。

この前、聡が波留子の兄の辰夫と喧嘩をしたときにも、この姉は、頭を綱帯ほうたいでぐるぐる巻きにした弟を連れて掛け合いに来た。そのときの剣幕も凄かった。

聡と辰夫の喧嘩は、聡が波留子に渡したラブレターが原因であった。学校帰りの聡を辰夫が空地に待ち伏せた。

「穢れを知らぬ清純で清潔な妹に、付け文するとはけしからん！」

そのころはまだ、中学の柔道部の副将だった辰夫から(そのころという訳けは、目下彼は浪人中だからである。大阪と京都で六つ大学を受験して全部失敗した)いきなり胸倉をとられて二度まで投げ飛ばされた聡が、三度目に、そばの溝板を掴んで起き上がるなり相手の頭めがけて撲りつけると、辰夫はいとも簡単に目を廻して卒倒してしまったのだ。

「打ちどころが悪かったらあの世行きかも知れんというお医者さんの診断でおましたんだす」

どうしてくれると言わんばかりに詰め寄るお末だったが、このときは幸いなことに与一郎がいてくれた。

彼は得意の辯舌で、男女七才にして席を同じゅうせずの考えはもう古い、
「こんなことでは日本の男と女はいつまで経ってもアカンと思いますねン」

と、言葉巧みに相手をまるめこみ、

「鞆うづはの中通りに英語や国語のええ先生がいたはるいうことで、一週間に二へんくらい……」
大槌家の二階で二人が会えるようにすることでお末を同意させてしまったのだ。

「けど、交際と申しまして、お互い、机を並べて学校の予習復習をする時間のあいだだけ、
という約束でございました。ところが、今日はまたどういふことでございますかいな」
白昼厚釜しくも、大阪随一の繁華街といわれる道頓堀界限を二人で肩を並べてウロウロうろ
つき廻り、映画を見て御飯を食べて……

「それもだすな、聡さんは学校の帽子と上衣を取って、波留子はおいさまんの着物を着せても
ろて、つまり、人目を忍んで変装をしますのやで」

お末が顔を紅潮させ、口許をひよっとこのように歪めながら言う、

「変装なんかじゃありません！」

いきなり、ふさの頭越しに、聡の声が後ろから飛んで来た。

その声の方をカッと睨んでお末が叫んだ。

「ほたらなんだすねン。ほたらなんで、学校の制服制帽で堂々と歩きはれしませんのや！」

「それは世間の目がうるさいからです」

「うるさいということは、したらいかんということやおまへんのんか」

「ぼくはそうは思いません。世間の目が理由もなくきびしすぎるんです」

「なんだすて……?!」

お末の額に青筋が走った。明らかにヒステリーの前兆である。

「まァまァ」

はな枝が敏感にそれを悟って、執り成すように口を挟んだ。

「二人で歩いて、そのときうちの聡がお宅の波留子さんに、なんぞ申し訳けの立構んようなことでもしましたんやろか」

「あほらしい！ そんなことがあって堪りますかいな。けど、わてはな、このままほっといたら将来とんでもないことになるчуюことを心配しとりますのや」

「ほたら今後は、どないしたらええとおっしゃいますので？」

はな枝が訊くと、お末は言下に、

「聡さんと波留子とのお付き合いは、これまでにしてほしうますねん」
と言ったのけた。

とたん、

「そんな馬鹿な。ぼくは嫌です！」

聡が異議を申し立てた。

「波留子さんはどうだす？」